

実践!

経験やカンに頼らない  
根拠のある  
認知症ケア

10

Q&Aで学ぶ

## コロナ禍で認知症の症状が悪化した利用者への対応

Q1

リモコンが使えない、時計が読めないなど、できないことが急に増えたAさん。どう対応すればいい?

比較的自立した生活を送っていたAさんですが、コロナ禍になり、リモコン操作ができない、時計が読めないなど、できないことが増えました。そのせいか、落ち込んだり、イライラしたりすることが多くなってきました。



A できなくなったことを否定せずに受け止め、具体的な対応をしましょう

コロナ禍で、認知機能や身体機能の低下により日常の些細な動作や作業ができなくなる人が増えました。「やり方が変わったからできない」「機械が壊れている」などと主張するのは、できなくなったことを認めたくないという気持ちの現れかもしれません。主張を否定したり、できないことを責めたりせず、簡単な説明や表示を増やすなどして、できないことをサポートする姿勢で対応しましょう。



こんな時 どうする?

▶▶ 制作などのレクに参加しなくなりました



意欲の低下や気分の落ち込みが続くと、認知機能に悪影響を与えることもあります。「作品を持ち帰ったら、ご家族に喜ばれますね」など、モチベーションを上げる声かけで誘ってみましょう。作業を簡略化したり、部分的に手伝ったりして、利用者が自信を持てるように援助することも大切です。

経験やカンに  
頼らない

# 根拠のある 認知症ケア

## ⑩ コロナ禍で認知症の症状が悪化した利用者への対応



監修 里村佳子

社会福祉法人呉ハレルヤ会 呉ベタニアホーム理事長、広島国際大学臨床教授、広島県認知症介護指導者、広島県精神医療審査委員会委員、呉市介護認定審査会委員。2017年、訪問看護ステーション「ユアネーム」(東京・荻窪)を開設。著書に「尊厳ある介護」(岩波書店)。

新型コロナウイルスの感染が拡大するなか、認知症の症状が悪化する高齢者が増加しています。コロナ禍での生活スタイルの変化が認知症にもたらす影響と、症状を悪化させないために必要な配慮についてお話を伺います。

文/森 麻子 イラスト/藤原ヒロコ

新型コロナ禍の生活が認知症の悪化を招く背景には、コミュニケーションや身体活動の制限による精神的ストレスや不安の高まりに加え、活動量や刺激の減少による認知機能や身体機能の低下があります。症状の悪化を防ぐには、感染防止に努めるなかでも、生活リズムを保つ、3密を避けながらコミュニケーションの機会を設ける、適度な運動やレクリエーションを継続するなど、できるだけ今までに近い生活を心がけることが必要です。

新型コロナウィルス感染症の流行が始まって以来、私たちの暮らしは、感染から身を守るための新しい様式を取り入れた生活へと大きく様変わりしました。当然、その影響は介護施設にも及び、感染リスクを減らすため、マスクの着用をはじめ、スキップや外出、レクリエーションを制限するなど、さまざまな変化がもたらされました。そして今、コロナ禍におけるこのような生活の変化で認知症の症状が悪化させる高齢者が増えていることが指摘されています。

感染予防に  
配慮しつつ  
今までに近い生活を

## 認知症の症状悪化による影響

コロナ禍の生活による認知症の症状悪化が、生活にどのような影響をもたらすのか、具体例を挙げて見てみましょう。



### 身体機能の低下

筋力や咀嚼力、運動能力の低下、関節の拘縮などの身体機能の低下によって、転倒や誤嚥のリスクが高まります。



### 認知機能の低下

判断、記憶、空間認知といった認知機能が低下し、食事や排泄、着替えなど日常生活の動作がスムーズにできなくなります。

### BPSD (行動・心理症状) の悪化

環境の変化によるストレスや不安からBPSDが悪化し、暴言・暴力や妄想、意欲低下が顕著に見られるようになります。

